

第四章 中近世移行期の美濃における「寺内」

はじめに

第一節 濃尾地域に展開する本願寺系「寺内」

第二節 織田信長の美濃支配と門徒動向

第三節 美濃の「寺内」と村落

むすびにかえて

結 章

論者は、戦国期美濃国の本願寺教団の展開の考察に先立ち、序章において、以降に解明すべき三つの課題を、現在注目されている分析視角に導かれつつ提示している。その第一は、各地域における真宗教団史研究の進展に伴いその展開の多様性と特性が注目される状況の下で、美濃におけるそれへの基礎的な考察を通じ、当該地域における教団展開の特質それ自体を明らかにすることであるとする。第二には、地域教団の実態分析の成果を踏まえ、戦国期の本願寺および地域教団が近世的なあり方へと如何なる展開を遂げていくのかに留意しつつ、これと関わる議論を提示することであるとする。また第三には、地域史、政治史研究において、史料の検討を踏まえた分析が深化している状況を受け、当該地域の政治史の中に門徒の動向を的確に位置づけることであるとする。以上、論者は、地域教団史、本願寺教団史、地域政治史という三つの分析視角から導き出される課題を設定しつつ論を進めることを明示する。

第一章では、まず基礎的な作業として、当該地域の寺院に現存する法宝物やその裏書の分析により、美濃地域における真宗の伝播と本願寺門徒登場の経緯を究明している。それによれば、美濃・尾張両国の国境地帯である木曾川・長良川流域を中心に尾張や三河の有力寺院を本寺とする末寺の展開が多数確認できるのに対し、これより西に位置する揖斐川の流域では、美濃国内で本末関係が完結するような末寺や、本願寺宗主と直接師弟関係にある直参門徒が多数確認されるとする。また、長良川を遡上した山間部の郡上では、飛騨や越前の有力寺院が門末を獲得する一方、郡上に拠点を置く安養寺が大規模な末寺形成を成し遂げているとする。論者は、こうした戦国期の美濃国における本願寺教団形成期の特徴を整理した上で、美濃においては前述の三地域を中心に、それぞれ異なる性格の門徒集団が結成されたことを指摘している。

続く第二章では、前述の門徒集団のうち、美濃国内の有力寺院によって形成された揖斐川流域の集団に注目し、これを西美濃教団と呼称してその組織的な展開について考察を進めている。西美濃教団は、本願寺から特定の直参門徒に対して勤めるよう要請される役負担を「美濃衆」や「西美濃」と称して地域として負担し、地域内で与えられた負担を分配するなど、地域教団として自律的に役負担に対応している。しかし、天正8年(1580)に本願寺は「石山合戦」に敗れ、宗教役を用いて地域教団を掌握する体制は一旦途絶える。本願寺はその後、信長・秀吉の政権下で展開する道を選び、天正10年以降、各地での地域教団支配を強化してゆく。その一環として、美濃においては従来門徒集団を一国規模でのそれへ再編してゆく方針が示されるが、在地においてそれは受容されず、在地教団掌握の主導権をめぐる対立が想定されることが指摘される。そして論者は、こうした対立が東西分派に作用していくという見解を提示している。

第三章においては、西美濃教団と政治勢力との具体的な関係が考察されている。従来から行われてきた、政治勢力と門徒との間に敵対的な関係を措定する分析の枠組みを前提にした議論の中で、当時の美濃における政治勢力である土岐氏や斎藤氏は、美濃の門徒に対

して「妥協的」であったとされてきた。これに対して論者は、『天文日記』の記載等から、西美濃教団で最も有力な寺院のひとつである西円寺と美濃国守護土岐頼芸の弟である土岐五郎との緊密な関係性に着目し、西円寺が土岐政権との良好な関係の構築を目指していたことを指摘する。そして、天文年間後期の斎藤道三による土岐氏打倒に際し、西円寺が土岐五郎方の支援に回り一時的に国を追われる経緯を論じている。またその一方で斎藤道三が、本願寺勢力を完全には打倒せず、西円寺の帰国を許可し自らの政治体制内の存在として掌握していくという見方を示している。

第四章では、戦国期を通して美濃の各地に確認される「寺内」が如何なる存在であるかについて考察が進められる。「寺内」といえば、当該期をめぐる研究においては、都市として成長した畿内における寺内町の事例が著名であるが、地方の「寺内」については一向一揆の拠点となりやすいことが指摘されるものの、具体的な分析は従来それほどなされていない。美濃の「寺内」に対しては、領主が「寺内」を都市として保護していたような形跡もあまり確認されていない。本章では、こうした当該期の美濃における「寺内」の実態について、前章で指摘された政治勢力と敵対する真宗寺院ばかりではないという当該地域の特性を確認しつつ、反権力的な性格よりも体制内存在としての一面が強いことを指摘し、このことから斎藤氏や織田信長も全面的な「寺内」解体は実行していないと推察する。そして信長の滅亡後、多くの禁制史料に「寺内」が登場する背景をも分析し、これらの「寺内」には、町場としての発達が特に期待されているわけではなく、むしろ合戦から身を守るための場として重要な役割が期待されていたとする。そして、この時期の美濃における「寺内」は、真宗寺院が村落支配の象徴として形成するものではなく、周辺住民との強い結びつきにより形成されたものとしている。

以上、四章にわたり美濃地域に展開した本願寺教団の特質について論じた上で、論者は冒頭に掲げた三つの課題に対して、本論から得られた成果を踏まえ整理している。

第一の地域教団史から導かれる課題に対しては、主に第一章・第二章を通して、美濃地域における教団形成の地域的な差異を明らかにしたとする。中でも独自の特性が顕著にうかがわれる西美濃における教団の展開について、本願寺からの宗教的な役を媒介とする集団として考察を行い、少数の有力寺院ではなく多数の直参門徒が構成員として役の負担に関わっている点、在地主導の教団としての意識が非常に強い点などの特質を明示している。

第二の本願寺教団史からの課題に対しては、主に第二章・第四章を通して、「石山合戦」終結後に本願寺が教団体制強化の一環として美濃教団の再編を企図したのに対し、在地の側からの反発があり容易に実現しなかった可能性を指摘する。一方、在地社会では、「石山合戦」終結以降も真宗寺院を中心とする「寺内」が美濃の各地で確認されるように、真宗寺院の村落社会における重要性は変化しなかった。これらの事実からは、移行期の社会の中での、本願寺の求める変化のあり方と在地の門徒のそれとの間での意識の差を見出すことができるという。

第三の地域政治史からの課題に対しても、第三章・第四章での考察を通して、論者は在地教団が政権との良好な関係構築を志向する面や体制内存在として存続していく面を指摘し、こうした点こそを美濃における本願寺教団の基本的な特徴と捉えるべきとしている。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、上述のように、地域ごとに異なる成立の経緯と特性を持つ美濃における本願寺教団の展開について、戦国期を中心に考察しようとしたものであり、先行研究がそれほど多くない当該地域の教団史を通時的に論じた貴重な成果といえるものである。近年は、

教団史における地域ごとの多様性や特性について改めて注目がなされてきており、また、戦国期から近世統一政権期に至る本願寺教団史を、特に近世とのつながりの中で如何に捉えるかについての関心や、進展する地域政治勢力に関する研究の成果を踏まえこれと各地の教団の関係を如何に理解するかについての関心も高まりをみせている。論者は、こうした近年注目される研究視角・関心を踏まえ、これらを明らかにする好適な素材として美濃地域の本願寺教団の特質の究明につとめている。『天文日記』や「本願寺番衆差定」など本願寺側に遺された史料をはじめ、各寺院所蔵の文書や記録類、さらには方便法身像等の法宝物の裏書類など、本願寺と各地域双方に伝存する多様な史料を丹念に収集・整理し、丁寧な分析と検討を行っている。進展が待たれている上述の関心・分析視角からの本願寺教団史の研究を、未解明の部分の多い美濃地域における動向を対象に着実に進めた点において、本論文は高い意義を有するものである。殊に、第二章において、当該期の西美濃教団の特質についてまとまった形で論を提示している点、第四章において、従来、論じられることの少なかった美濃地域の「寺内」について正面から論じようとした点において、それぞれ貴重な成果といえる。

総体として右のような意義を有すると認められる本論文であるが、以下に記すようにいくつかの問題点も指摘された。

全体に関わるものとしては、先ず各部分の考察の冒頭で研究史を踏まえて自身の論を進めていこうとする際、参照する先行研究の説を多くの場合そのまま認め援用する手法が採られている点が、独自の論を導き出すべき行論上の基本的な問題点として指摘された。また、現今の研究史における課題的な分析視角に留意しつつ論を進めたことは評価されるが、論者自らが当該期の本願寺教団を如何なる関心・視点から見たいこうとするのかが総体として必ずしも明確に表現されていない点について指摘がなされた。また、本論文で明らかにされた美濃地域における本願寺教団の諸特質が、如何なる地域的な状況のもとで形成され、それが本願寺や地域政治勢力との関係の中で如何なる意義を有したのかについての見解がなお十分に示されていない点についても指摘がなされた。なおこれら以外にも個々の文章表現において改めるべき部分について指摘があった。

次に各章ごとに指摘された問題点としては、第一章において、初期真宗の時期における法宝物の画讃の分析に際しての親鸞の著述との異同に関する検討や、秘事法門関係の史料の検討を行う際に、より詳細な分析が必要な箇所が見られた点、第二章での、西美濃地域や美濃国内尾張系の門徒や寺院の番衆上山状況の分析において、より周到な分析が行われるべき余地が見られた点、第四章の「寺内」に関する検討の部分において、それまでの部分と異なり西美濃以外の地域における展開が多く扱われたことに関して、全体との整合性の面で考慮すべき箇所が見られた点など、個々の論述箇所における分析の妥当性について指摘がなされた。

以上に記したように、本論文にはいくつかの問題点が見られる。しかし、従来まとまって論じられることが少なく、かつ研究対象として大きな意味を有する美濃地域における本願寺教団史の通時的な究明に真摯に取り組み、種々の注目すべき成果を挙げた意欲的な論考と位置づけられるべきものである。向後は、本論文の成果を踏まえた、当該期美濃における本願寺教団の構造、及びそれと本願寺や政治勢力との関係、更にはこうした諸動向の背景となる地域の状況・論理についてのより詳細な実態の究明と理解の深化が望まれる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により、2019年12月25日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、老泉量に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当であると判断した。